

## フランク・ノリスの『マクティーン』に見る グロテスクな人びと

中 島 祥 子

- I はじめに
- II 『マクティーン』の時代
- III 希望の町カリフォルニア州サンフランシスコ
- IV グロテスクな人びと
- V おわりに

### I はじめに

文芸評論家のリチャード・チェイス (Richard Chase) が「遺伝・環境による墮落のテーマに固執している」<sup>1)</sup> 作家と評価し、またアメリカ文学研究家でカリフォルニア大学バークリー校 (University of California, Berkeley) の教授であったジェイムズ・D・ハート (James D. Hart) がカリフォルニアにおける19世紀末の生活をありのままに描いた作品と評価した<sup>2)</sup> 『マクティーン』(McTeague: A Story of San Francisco, 1899) を著したベンジャミン・フランク・ノリス (Benjamin Franklin [Frank] Norris, Jr., 1870-1902) は、南北戦争が終わって5年後の3月5日、腕一本たたき上げで成功した宝石卸売業者の父と舞台女優の母であるガートルード (Gertrude) の間に誕生した。

ノリスの出生地はシカゴであるが、彼が14歳のときに、一家は父の健康を考慮してサンフランシスコに移住し、父親は不動産関係の仕事を始めた。ノリスはその3年後に画家を志していたこともあって、パリに遊学する。後にいわばアメリカにおける自然主義作家の泰斗としての評価を受けることになるノ

リスが、このパリ遊学中に自然主義作家の大御所的存在エミール・ゾラ (Émile Zola, 1840-1902) に浸っていたように受けとめられる可能性があるが、ゾラの影響を受けるのはカリフォルニア大学バークリー校に入ってからだと言われている。ノリスがパリに滞在中、父親の意に反して夢中になったのは、中世の年代記作家、ジャン・フロワサール (Jean Froissart, ?1337-1405) であり、また中世フランス文学であった。それを知った父は、将来ノリスが宝石商を継がないのではないかと危ぶみ、すぐさま帰国させた。仕方なく帰国したノリスはカリフォルニア大学バークリー校に入学し、この在学期間中にゾラに心を奪われたとされている。しかし、尾上典子教授が指摘するように<sup>3)</sup> ノリスはゾラの自然主義文学理念をそのまま自らの作品の基調にしてはいない。このことは直接的ではないが、筆者も本論で後述するつもりである。ただ、この時期にチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) の進化論や、その理論を人間界に応用したハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の社会進化論 (social Darwinism)<sup>4)</sup> に触れたことは、ノリスの文学に大きな影響を与えたようである。

ノリスが生まれ育った南北戦争後のアメリカは、空前の好況を迎え、産業資本主義が発展し、大企業、いわゆるビッグビジネス時代が始まるわけだが、その背後には徹底した自由放任主義 (laissez-faire) と適者生存 (the survival of the fittest) の法則、つまり社会進化論の法則があった。その上、政界と産業界は汚職にまみれ、利欲心が庶民をも支配するいわゆる「金びか時代、メッキ時代」 (the Gilded Age) を迎えていた。その一方で、数多くの人びとが社会進化論の法則に適合できずにいた。このタイプの間人が本論で扱う『マクティーン』にも登場している。

ノリスは在学中に、舞台女優であり、また英国文学に通じてもいた。母親の資金援助を得て長編詩を出版した<sup>5)</sup>。これが、彼が作家の道へ入る契機の一つとなった。彼はカリフォルニア大学バークリー校ではあまり学業に専念することなく中退し、父と不仲になった母親、そして弟と一緒にハーヴァード大学 (Harvard University) のあるマサチューセッツ州ケインブリッジ (Cambridge,

Massachusetts) へ向かった。1894年、ノリスはハーヴァード大学の聴講生となり、当時、月刊総合雑誌『アトランティック・マンスリー』(*Atlantic Monthly*) や『クリティック』(*Critic*) の批評家として活躍し、また『マクティীগ』の登場人物の一人グラニス (Old Grannis) が趣味である製本作業の材料にしている『ネイション』(*Nation*)、あるいは『チャップ・ブック』(*Chap-Book*) にも寄稿していたゲイツ (Lewis Edwards Gates, 1860-1924) 教授<sup>6)</sup> に師事することになった。この教授の課題で書いた作品が後に『マクティীগ』になるのだが、憧れの教授であるゲイツの絶賛を浴びたことがきっかけで、ノリスはこれをほぼ完成に近い状態に仕上げた。

『マクティীগ』は、1893年に、実際にサンフランシスコで起こったセアラ・コリンズ殺人事件 (the 1893 San Francisco murder of Sarah Collins) に構想のヒントを得て、書かれたと言われている<sup>7)</sup>。この物語には主人公のマクティীগ (McTeague) のほか、19世紀末にカリフォルニア州サンフランシスコのとある安アパートに生きるさまざまな民族的背景を持つ人びとの姿が描かれている。

主人公マクティীগはサンフランシスコのポーク通りで歯科医院を営んでいる。だが、歯科医師になるような環境に生まれたわけではない。父親はカリフォルニア州プレイサー郡 (Placer County) の金鉱、北斗七星鉱山 (Big Dipper Mine)<sup>8)</sup> の組長で、母親は鉱夫の賄いをしていた。父親は普段はよく働いたが、酒を飲むと暴れ、また、その命を酒によって奪われてしまう。母親は息子にそうした父親と同じ道を歩ませたくないと考えていた。そこで、母親は巡回歯科医師が鉱山へやってきたときに、息子をその医師の弟子にしてもらった。マクティীগは鉱山を後にし、その巡回医師のもとで仕事を覚えていく。そして母親が亡くなった後、その遺産を元手に歯科医院を開業したのだった。

マクティীগは金メッキの鳥かごに入ったカナリアを可愛がり、大切にしている六角アコーディオン (concertina) を手すさびに弾くといった繊細なところがある反面、器具を使わずに患者の歯を抜いたこともあるほどの怪力の持ち

主である。素直で温順な男だが、体にも心にもどこか鈍重なところがあり、またナイヴェテ (naiveté) などところもある人物であった。

ある日、マクティーン唯一の友人であるマーカス・スクーラ (Marcus Schouler) が、いとこのトリナ (Trina) の歯の治療を頼みに来る。これをきっかけにして出会ったマクティーンとトリナはやがて結婚し、家庭を持つことになる。

二人が住むアパートには、かつてドレスメイカーとして働いていたミス・ベイカー (Miss Baker) と獣医の老人グラニスに住んでいる。彼らは隣同士の部屋に住んでいるものの、言葉を交わし合ったことがない。しかし二人は壁際に椅子を置き、耳を澄ませ、互いの日々の行動や習慣を本能的に感知していたのだ。

彼らが住むアパートには、マリア・マカパ (Maria Macapa) という雑役婦がいるが、彼女はかつて自分の一族は黄金の食器をたくさん所有していたという、本当とも嘘ともつかぬ話をしてまわる女であった。彼女はアパート中の古物や不要物を集めては、ガラクタ屋 (junk shop) のザーコウ (Zerkow) の元へと持って行き、わずかなお金を手に入れるのだった。

最初のうちは、マクティーンとトリナの生活は順調に進んでいくが、マーカスの裏切りによって、マクティーンが歯科医を廃業しなければならない事態に陥ってしまうと、トリナは度が過ぎる儉約家ぶりを発揮し、金貨に固執するようになっていく。守銭奴と化したトリナに対して次第に怒りを覚えていくマクティーンは、やがてトリナを殺害してしまう。

逃げるマクティーンはデスヴァレー (Death Valley) に入り込んでいくが、ついに追っ手の一人であるマーカスに見つかってしまう。砂漠の真ん中での死闘の末、マーカスは息絶えるが、マクティーンは自分自身とマーカスとが手錠で繋がれていることに気付く。

こうしたあらすじの『マクティーン』が、多くの批評家が規定する自然主義文学から離れた視点で読める作品として感じられるのは、物語全体の構成として数組の男女のロマンスを扱っていることによると推察される。ここではさま

ざまな形でロマンスが提示されているが、そのロマンスを幸福裡に成就させることができるのは、60歳の坂を越す二人の男女、老人グラニスとミス・ベイカーだけである。通俗的には、「老いらくの恋」とか「遅咲きの青春」とも言うべき二人の恋だが、この物語の中では、二人が慎み深く、また控えめながらお互いの本質を無自覚的に把握し、また後述するように、二人が自発的に心情を吐露するだけに真実の愛を感じないわけにはいかない。それだけに、多くの読者はこの二人の愛にこの上なく素晴らしい詩情 (an exquisite poetry)<sup>9)</sup>を見いだすことができるだろう。

しかし、なぜノリスは、他の登場人物が迎える結末とは異なり、グラニスとミス・ベイカーだけに、年齢にかかわらず明るい未来を用意したのだろうか。

マクティীগ、その妻トリナ、物語最後にマクティীগと共にデスヴァレーで命を落とすことになるマーカス、雑役婦 MARIA・マカバ、ガラクタ屋のザークウ。彼らには、その程度やあり方に多少の違いはあるものの、どこか「歪められた、グロテスクな」(distorted, and grotesqued)<sup>10)</sup>ものを感じずにはられない。それゆえに、ノリスは彼らにグラニスとミス・ベイカーとは異なる結末を準備したのかもしれない。

ノリスは社会環境への適応性に欠けたグロテスクな人物 (maladjusted, freakish characters) を描く技能に秀でていた<sup>11)</sup>と評されるが、この小説の時代、すなわち「金ぴか時代」と呼ばれた、金銭のためには手段を選ばずの風潮が醜悪な物質主義をはびこらせた時代にあって、この風潮から取り残された人たちが生きていかなければならないとき、歪んだ存在、すなわち「グロテスク」な存在へと変身せざるを得なかったのではないかと筆者は考えている。そこで本論では、その歪んだ、グロテスクなものとは何かを探ることにしたい。

## 【注】

- 1) Richard Chase. *The American Novel and Its Tradition* (New York : Doubleday Anchor books Doubleday & Company, Inc., 1957), p.188.
- 2) James D. Hart. *The Oxford Companion to American Literature* (New York : Oxford

University Press, 1965), p.606.

- 3) 尾上典子「ロマン主義作家としての Frank Norris—*McTeague* を中心として」(松浦暢教授古稀記念論集『水の流れに』東京, 中央公論事業出版, 2000年), p.80.
- 4) 社会進化論の英語表記については, social と小文字での表記と Social と大文字での表記があるが, 本稿では Paul S. Boyer. (ed.) *The Oxford Companion United States History* (New York : Oxford University Press, 2001), p.725. に依り, social Darwinism と表記する.
- 5) <http://amsaw.org/amsaw-ithappenedinhistory-030504-norris.html> (Nov. 20, '11)
- 6) ゲイツ教授は雑誌に寄稿するほか, スコットランドの文芸批評家フランシス・ジェフリー (Francis Jeffrey, 1773-1850), 英国の神学者で文人のジョン・ヘンリー・ニューマン (John Henry Newman, 1801-90) や, 同じく英国の詩人で批評家のマシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) の全集の序文を執筆するなど優れた業績を遺している.
- 7) Sacvan Bercovitch (ed.). *The Cambridge History of American Literature, Vol.3* (Cambridge : Cambridge University Press, 2005), p.509. セアラ・コリンズは幼稚園で洗濯婦として働いていたが, 酒乱の夫に小遣い金をあげなかったためにその夫に殺害されたと伝えられている。『マクティーン』のトリナはセアラがモデルのようである.
- 8) ノリスは Big Dipper Mine in Placer County (p.263) としか書いていないが, この鉱山ではゴールドラッシュ直後から採鉱が始まった。1856年には週10万ドルに値する金の採掘量を記録し, 1880年までに2,000万ドル以上を産出するまでになったという。また, 昨今では sniper と呼ばれる「(古い採掘場などで)金を採掘する人」(*The Random House Dictionary*) が出沒すると言われ, 北斗七星鉱山が金鉱であったことは確かなことである。  
また, この鉱山についてプレイサー郡政管理委員会 (Placer County Board of Supervisors) に問い合わせたところ, 上級官吏補佐官のテリ・サヤッド・イヴァルディ (Teri Sayad Ivaldi) 氏から, 現在も金鉱として機能している旨の確認を得た。  
<http://www.mindat.org/loc-85084.html> (Nov. 20, '11)  
<http://www.westernmininghistory.com/articles/304/page1/> を参照, (Nov. 20, '11)
- 9) Don Graham. *Critical Essays on Frank Norris* (Boston: G. K. Hall & Co., 1980), p.9.
- 10) Frank Norris. *Norris : Novels and Essays* (New York : Literary Classics of the United States, Inc., 1986), p.533. ここでは「もの」の喩えとして用いられているが, 登場人物にも同じ素性が埋め込まれていると考えられる.
- 11) Sacvan Bercovitch (ed.). *The Cambridge History of American Literature Vol.4* (Cambridge : Cambridge University Press, 2005), p.494.

## II 『マクティーン』の時代

文学作品に登場する人物を理解する上で, 彼らがどのような時代を生きてい

るかを知ることは不可欠である。ことにリアリズム文学の時代と言われる19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ文学は、急速に変化していく時代に生きていく人びとを描いた作品が多く、それだけに時代背景の検証は作品をよりよく理解するうえで欠かすことはできないと筆者は考えている。

『マクティーク』は新しい世紀を迎える直前に出版されたが、そのわずか9年前の1890年、暮れも押し迫る12月29日にサウスダコタ州南西部の小さな村ウーンデッドニー（Wounded Knee）で、寒さと飢えに苦しむ先住民スー族（Sioux）の婦女子200人以上が連邦政府軍によって虐殺されるという極めて前近代的な事件があった。その一方で、この事件が起こった同年には、アメリカ合衆国からフロンティア（開拓前線）が消滅していたと発表された。1869年には大陸横断鉄道は完成し、それから一世代を経ぬうちにアメリカ国内のどこを見回しても、1平方マイル当たりの人口が2人未満のところはなくなったとされたのだ。

この発表は、アメリカが新しい時代を迎えたことを宣言するかのように、1893年、歴史学者フレデリック・ターナー（Frederick Jackson Turner, 1861-1932）によってなされ、ターナーはシカゴのアメリカ歴史協会（American Historical Association）の年次大会で論文「アメリカ史におけるフロンティアの意義」（‘The Significance of the Frontier in American History’）を発表し、そのなかで1890年にはアメリカ合衆国からフロンティアが消滅したことを宣言したのだ。<sup>1)</sup> この論文の重要性は、フロンティアがアメリカ人にとってどのような意義があったのかが分析されたことであった。ターナーは、消滅してしまったフロンティアこそがアメリカの民主主義、個人主義、ナショナリズムの形成と発展の原動力であったことをこの論文で詳述している。

アメリカにおけるフロンティアは、ヨーロッパから移民してきた人びとにも大きな変革を与える場としての役割を果たした。自らの過去を投げ捨て、新しい土地アメリカに馴染み、アメリカ人という新しい人間にならなければならないことを教えた場所であったのだ。言い換えるならばフロンティアは移民してきた人びとにとって、あるいは乾坤一擲、新たな人生を歩む意志を固めた東部

にいた人びとにとって、アメリカンドリームを達成しうる場所であったと言える。東部での生活に見切りをつけて、西部へと移り住んでいく人びとは自らの力で土地を開拓し、新たな生活をスタートさせるという希望を持っていたはずだ。しかしそのフロンティアが消滅した以上、物理的には何らかの形で資産を持っていなければ、土地を購入して農業に携わることすらできなくなったことになる。そうなれば、大都市やその近郊で不熟練労働者としての職を得ることしか道は残っていない。特にこの時代、すなわち 19 世紀末にアメリカに多くやってきた新移民 (New Immigrants) にとってはなおさらのことであった。彼らの多くが東欧、南欧からの貧しい移民であったからだ。また精神的には、フロンティアにあるべき「夢」や「希望」をどこに求め、どのように持てばよいのか、人生に倦怠感ばかりを感じる人も生じたことだろう。登場人物の一人マーカス・スクーラが職を転々としながら、最終的には銀の拍車を付け、拳銃を収めたホルスターを腰にするカウボーイに憧れ、その姿のまま砂漠のなかで斃れたのも無理からぬことだったのかもしれない。

南北戦争 (Civil War, 1861-65) 後に農本主義から資本主義社会へと変貌を遂げたアメリカでは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて工業化が急速に進んでいった。発展していく産業にはますます労働力が必要とされるようになり、資本家は 1880 年代から急速に増え始めた新移民に目をつけたのであった。工場では機械化によって分業がすすみ、熟練技術の要求されない単純な仕事が増加していた。新移民の多くは祖国での経済的困窮から逃げるようにしてアメリカへやって来たために、基本的に貧しく、教育の程度は極めて低かった。そこで資本家たちはこの不熟練労働者である安い労働力を利用したのである。

しかしそうした仕事は肉体労働であることがほとんどであり、「資本」となる強靱な肉体を持ち合わせていない者はそれこそ、地べたを這うような生活をしなければならなかった。雑役婦のマリアとガラクタ屋のザーコウのように、がらくたを集めてはお金に換えて生活していくという移民も少なくなかったであろう。ザーコウはポーランド系ユダヤ人であり、典型的な新移民である。



ザーコウの暮らしぶりから当時の移民たちのどん底生活の様子をうかがうことが可能だ。

マリアがザーコウの店に入ったとき、ザーコウはちょうど日課にしているくず集めから戻ってきたところだった。おんぼろの荷馬車が座礁した難破船のように玄関の前に止めてあった。関節を痛ましく腫らした、哀れな馬は裏手の小屋で腐った一抱えの干し草を貪り食っていた。ガラクタ屋の店の中は、暗く、じめじめとしており、息詰まるようなあらゆる種類のにおいが立ちこめていた。壁や床の上、そして垂木からぶら下がっている大量の屑物は埃で黒ずみ、錆び付いていた。あらゆるものがそこにはあった。あらゆる職業、社会階級がそこに示されていた。鉄や布や木でつくられた物もあった。大都市がその日常生活で捨て去ったあらゆる屑物がそこにあった。ザーコウのガラクタ屋は役に立たなくなったそうした品々の終の棲家であり、養老院であった。<sup>2)</sup>

シカゴからサンフランシスコへと移住してきたノリスは、まだ15歳になるかならぬ極めて繊細な神経をもった少年だったはずで、どん底の暮らしをせざるを得ない人びとの姿を自らの目に鮮明に焼き付けていたであろう。

主人公マクティーフの妻となるトリナは、ザーコウのようなどん底の暮らしを送っているわけではないが、「ノアの箱船の動物」を木片からジャックナイフで削り出しては家計の一部としている。

マクティーフの仕事、5,000ドルの利子、そしてトリナの木彫りという、3つの財源から得る収入は全部合わせるとちょっとした金額になった。トリナは、少しずつ5,000ドルに足していった貯金をすることさえできると断言した。<sup>3)</sup>

トリナのように主婦が内職をしたり、下宿人<sup>4)</sup>をおいて、家計の足しにし

たりすることは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての貧しい家庭においてはよくあることだった<sup>5)</sup>。

こうした貧しい暮らしを余儀なくされた移民のほとんどが、肉体労働を必要とする工場が集中する都市部に住むことが多かった。そして郊外には資本家や経営者が居を構えることとなった。歴史家のメアリー・ベス・ノートン (Mary Beth Norton) は、大量交通輸送機関と経済の変化が、都市化と郊外化を同時に進ませた要因である<sup>6)</sup>と指摘している。

1870 年代までの交通手段の主役といえば馬車であったが、1880 年代には工業化の波にのり、ケーブルカー<sup>7)</sup>が取って代わるようになった。いわゆるホワイトカラーの人びとや商店の店主などは郊外に住み、ケーブルカーを使って毎朝、郊外から都市部へと通勤していたのである<sup>8)</sup>。マクティーンやマークス、そしてトリナのように、このケーブルカーを使って郊外へ出かける人びともあっただろうが、マリアやザークウのようなどん底の暮らしをする移民たちには、近代化・工業化社会のあたかも象徴的存在であるケーブルカーを利用するだけの金銭的な余裕はなかったであろう。金銭的余裕がなければ、近代化・工業化する社会からただ取り残されていくだけである。

移民が送らざるを得なかった、こうしたどん底生活に拍車をかけたのが 1893 年から 96 年にかけての経済恐慌であった。歴史学者ファラガー (John Mack Faragher) によればこの恐慌は、それまでにあった恐慌のなかでも最悪なものであったという<sup>9)</sup>。また、歴史学者ハワード・ジン (Howard Zinn) も『民衆のアメリカ史』(A People's History of the United States, 1980) で、1893 年の経済恐慌について、「1893 年、アメリカを史上最大の経済危機が襲った。数十年間続いた急速な産業成長、金融操作、歯止めのかかない投機と不当利得の結果、すべてが崩壊した。642 行の銀行が破産、16,000 社の企業が倒産した。1,500 万人の労働人口のうち 300 万人が失業した。救済策を打ち出した州政府はなかったが、全国各地で大衆デモが市の政府を突き上げ、無料食堂を設けさせたり、道路工事や公園整備の仕事口をつくらせたりした」<sup>10)</sup>と述べている。

こうした時代だからこそ、サンフランシスコに居を移したノリスは鮮明に焼き付いた記憶を頼りに、そこに住むさまざまな人たちの姿を小説に書き込むことを試みたのではないだろうか。『アメリカ小説における自然主義の起源』(*The Beginning of Naturalism in American Fiction, 1891-1903*, 1950)の著者アーナブリック(Lark Åhnebrink)は、ノリスは『マクティーン』を組み立てるに際し、現代化するカリフォルニアを理解するためには都会の生活を材料にした小説を書かなければならないことに気づいていた<sup>11)</sup>と指摘している。

現代化する社会の中でマクティーンが無免許が暴露され、歯科医師として働けなくなると、外科用器具の製造業者<sup>12)</sup>としての職を運良く得ることになる。だが、その仕事もやがて景気の悪化が原因で解雇されてしまう。職を失ったマクティーンとトリナが最終的に住むことになった部屋の様子を、ノリスは次のように描写している。

木造部の隙間にはゴキブリが顔を出し、壁紙はじとじとした壁から膨れあがって、はがれ始めていた。トリナはずっと前に、埃を払ったり、布きれで家具を拭いたりするのをやめてしまっていた。窓ガラスや部屋のすみには塵が厚く積もっていた。その路地のあらゆる不潔さがまるで泥状の上げ潮のように彼らの部屋に押し寄せてきていた。<sup>13)</sup>

こうした状態は、後述することになるトリナの守銭奴ぶりゆえのことではあるが、しかし当時の社会の底辺に住む人たちは、まさに19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したジャーナリストのジェイコブ・リース(Jacob Riis, 1849-1914)が撮った写真にみられるように、足の踏み入れようもないほどゴミのようなもので溢れかえった部屋に住んでいたことだろう。

トリナの両親が携わっていた絨毯洗濯と室内装飾業(carpet-cleaning and upholstery business)<sup>14)</sup>も、おそらくこの時期の経済恐慌により経営が悪化し、その後倒産している。彼らの職業は日々の生活に不可欠なものではないため、この時期に経営を維持していくことは難しかったのだろう。トリナの両親

親、特に父親ジッペ (Sieppe) 氏の時代の流れを見抜く眼に狂いがあったのだ。彼もまた近代化・工業化する社会から取り残されてしまった一人と言えるのである。

【注】

- 1) Frederick Jackson Turner (with commentary by John Mack Faragher). *Reading Frederick Jackson Turner* (New Haven : Yale University Press, 1994), p.31.
- 2) Frank Norris. *Norris : Novels and Essays* (New York : Literary Classics of the United States, Inc., 1986), pp.292-3.
- 3) Frank Norris, *op. cit.*, p.358.
- 4) 1880年の時点で世帯人口当たり2%、およそ100万人が下宿人となっていた。  
<http://www.census.gov/population/www/documentation/paa2008/Scopilliti-OCConnell-PAA-2008.pdf>を参照。(Nov. 20, '11)
- 5) <http://www.theusaonline.com/people/family-life.htm>を参照。(Nov. 20, '11)
- 6) Mary Beth Norton (et al). *A People and a Nation : A History of the United States* (sixth edition) (Boston : Houghton Mifflin Company, 2001), p.520.
- 7) ケーブルカーは日本では山岳地帯に用いられることが多いが、必ずしも坂道ばかりで利用されていたわけではない。地中で回転する鋼索に車両をかみ合わせて線路上を走る乗り物で、路面電車を指す。
- 8) Frank Norris, *op. cit.*, pp.266-7.
- 9) John Mack Faragher, Mari Jo Buhle, Daniel Czitrom, Susan H. Armitage. *Out of Many : A History of American People* (Upper Saddle River : Prentice Hall, 1997), p.593.
- 10) Howard Zinn. *A People's History of the United States : 1492-Present (Perennial Classics)* (New York : Perennial, 2003), p.277.
- 11) Lark Åhnebrink. *The beginning of Naturalism in American Fiction, 1891-1903* (Uppsala : Lundequistska Bokhandeln, 1950), pp. 177-8.
- 12) Frank Norris, *op. cit.*, p.464.
- 13) Frank Norris, *op. cit.*, p.498.
- 14) Frank Norris, *op. cit.*, p.438.

### Ⅲ 希望の町カリフォルニア州サンフランシスコ

こうした時代を背景に物語が展開していく『マクティーク』だが、その舞台となるサンフランシスコは歴史的にどのような町だったのだろうか。

広島県大竹市からハワイを経てサンフランシスコに近いサンリアンドロ

(San Leandro) へ移住した両親のもとに生まれ、後にシャーウッド・アンドアスン (Sherwood Anderson, 1876-1941) の代表作とも評される『オハイオ州ワインズバーグ』(*Winesburg, Ohio*, 1919) を読んで作家となり<sup>1)</sup>、アジア系アメリカ人作家のメンターの存在となったトシオ・モリ (Toshio Mori, 1876-1980) の代表作に、『カリフォルニア州ヨコハマ町』(*Yokohama, California*, 1949) がある。この小説の最初の章「子どもたちよ、明日がくるぞ」(‘Tomorrow is Coming, Children’) に、『マクティীগ』の登場人物とはまったく逆方向から移民しようとしていた日本人に、サンフランシスコがどう捉えられていたかが描かれている。

『マクティীগ』に描かれているようなヨーロッパからの移民は、ジャーナリストのホラス・グリーリー (Horace Greeley, 1811-72) が発行していた新聞『ニューヨーク・トリビューン』(*The New York Tribune*) の論説で「若者よ、西部へ向かえ。そして国家とともに成長しろ」(“Go West, young man, and grow up with the country”), 「若者よ、西部へ」(“Go West, Young Man! Go West!”)<sup>2)</sup> と若者たちを煽ったように西部へ行けば夢が叶えられると考えていたが、日本からの移民も同じことを考えていたようである。

「アメリカ！」みんなは叫びました。「アメリカちゅうたら、世界の裏側にある国じゃろうが。あんた、異人の国行くちゅうか。異人の言葉が読めも書けもせんくせに、行って何するつもりじゃ？」わたしはにっこり笑っていました。そして、お祖父さんが書いて寄こしたサンフランシスコの街のことを、あれこれ夢のなかで思い描いていました。サンフランシスコー変わったおいしい食べ物がどっさりある街、金貨の街、見たことも聞いたこともない人や音楽があふれている街、大きな建物や船の街。<sup>3)</sup> (傍点筆者)

これを語っている人物がその後、サンフランシスコでどのような人生を送ったかは作品の中に求めればよいことだが、この話で、『マクティীগ』でも重

要な役割を果たす「金貨」が話題になっているのは興味深い。

サンフランシスコの北、現在のカリフォルニア州の州都であるサクラメント (Sacramento) 近郊で金が発見されたのは 1848 年、そして今ではアメリカンフットボールのチーム名にもなっている「フォーティナイナーズ」(Fortyniners) と呼ばれる、希望を抱いた人びとがカリフォルニアに押し寄せたのは、その文字通りの 1849 年のことであった。

その後 100 年間に産出された金の総額は 20 億ドル<sup>4)</sup> に相当すると言われている。人口が急増し、2 年後にはカリフォルニアは 31 番目の州に昇格した。他の州ばかりか、モリの作品に述べられているように「世界の裏側にある国」からもカリフォルニアへ向かう人々が急増したのである。サンフランシスコも、金が発見された時の人口はわずか 1,000 人だったが、1850 年には 20,000 人から 25,000 人にふくれあがっていた<sup>5)</sup>。

金が発見されたのはサクラメント近郊であったにも関わらず、サンフランシスコの人口が急増したのには理由があった。サンフランシスコは、サクラメントに金を掘りに行く人びとが夢を抱いて出発する「希望の町」であったのだ。当時アメリカ全土からカリフォルニアへ向かうには陸路か海路だった<sup>6)</sup>が、後者を選んだ人びとがカリフォルニアに到着してまず足を踏み入れるのが、港町サンフランシスコであった。『マクティーン』の主要登場人物以外にノリスは中国人、フランス人、ハンガリー人などの民族が、マクティーンと同じ町に住んでいることを話題にしているように、サンフランシスコは多様な民族が集まる、コズモポリタンな感覚を持つ場所であった。

1871 年 12 月、サンフランシスコを訪れた岩倉使節団の報告によれば、約 5 万人の中国人が暮らしをたて、5、6 年で「千金二千金<sup>よう</sup>を贏し」、年々「一千余万弗を、清国に輸送する」ほどであったという。なかには家や田畑を買うものもいたが、清の風習を変えず、弁髪のまま、「稲を炊き鞋を穿ち」、日用品に至るまで中国から取り寄せて、まったく別社会を形成して暮らしたようだ<sup>7)</sup>。金を掘り当てた者が富を手にすることができる、いわば平等なシステムであったが、メキシコ人や中国人には差別待遇がなされていたという。特に中国人に

は重い税金が課せられていたという<sup>8)</sup>が、それを考慮に入れた上で岩倉使節団の報告を考えると、いかに多くを稼ぎ出すことができたかということが理解できるだろう。その意味でサンフランシスコは「希望の町」だったのである。

しかし「希望の町」へ集まった人たちすべてが希望を叶えられたであろうか。希望を叶えられず、社会の片隅に取り残されていく人たちも存在したことは間違いない。『マクティーン』には、その両者の姿を見いだすことができる。いわば「夢を叶え、その後の人生への希望をつかんだ者」と「夢を叶えることはもちろん、希望もつかめなかった者」である。

以上のように、希望の町として成長するサンフランシスコの1890年代の様子を歴史学者でオクラホマ大学名誉教授のH・ウェイン・モーガン(H. Wayne Morgan)が『反逆のアメリカ作家 マーク・トウェインからドライサーまで』(*American Writers in Rebellion from Mark Twain to Dreiser*, 1965)の中で次のように書いている。

神秘的になぞめいた、それは美しい衣服を身に着けた東洋人や立派な制服の軍人を通りで見かけるかもしれない。ウィスキーを一杯やりながら金鉱掘りと言葉をかわしたり鉄道経営者とお茶を飲んだりすることができるかもしれない。波止場には世界から集まってくる物や人間が溢れていた。こうしたことを小説に仕立てる人もいたし、彼らの読者もたくさんいた。<sup>9)</sup>

こうした情景が見られたのはゴールドラッシュの波が過ぎた後である。サンフランシスコは大陸横断鉄道建設という大事業の根拠地にもなっていた。鉄道敷設の労働力として、この「金貨の街」<sup>3)</sup>へ、アジアからも多くの移民が押しかけていた。また、カリフォルニアでのゴールドラッシュから半世紀も経たないうちに、それまで「スワードの愚行」(Seward's Folly)とか、「スワードのアイスボックス」(Seward's Icebox)<sup>10)</sup>と多くの国民が目も向けようとしなかった土地、アラスカにゴールドラッシュが起こったのだ。欲望に充ち満ちた

人たちが再び金を目指して、海路アラスカへ向かうために、アメリカ国内から、また海外から港町サンフランシスコへ押しかけたことは想像に難くない。20世紀後半に入ってからも、サンフランシスコはやはり「希望の町」であり続けた。1950年代にビートニク（Beatnik）が台頭すると、その代表的な詩人ローレンス・ファリングヘティ（Lawrence Ferlinghetti, 1919-）やアレン・ギンズバーグ（Allen Ginsberg, 1926-97）らの作品の出版元としてシティ・ライツ社（City Lights Booksellers & Publishers）が誕生した。またサンフランシスコ・ルネッサンス（San Francisco Renaissance）といわれた、1960年代の文学者や詩人のたまり場ともなった。その1960年代、ゴールデンゲイトブリッジ（the Golden Gate Bridge）近くのヘイト-アシュベリー（Haight-Ashbury）にも、やはり新しい文化を創ろうとヒッピーたちが集まった。また、リベラルな土壌がつくられるなか、後にサンフランシスコ市長候補になったハーヴィー・B・ミルク（Harvey Bernard Milk, 1930-78）に代表されるような同性愛者は、カストロ・ストリート（Castro Street）を自分たちの町にしている。

このようにサンフランシスコは、すべからく新しい文化を迎える「希望の町」としてアメリカに存在する町なのである。

## 【注】

- 1) Russell C. Leong. *Amerasia Journal*, Vol.7 (Los Angeles : Asian American Studies Center, University of California, 1980), No.1, pp.87-108.
- 2) Stuart Berg Flexner. *I Hear America Talking : An Illustrated History of American Words and Phrases* (New York : Simon and Schuster, 1976), p.180.
- 3) トシオ・モリ著、大橋吉之輔訳『カリフォルニア州ヨコハマ町』（東京、毎日新聞社、1978年）、p.13。大橋吉之輔氏はシカゴで行われたシャーウッド・アンダスンについての学会において、アンダスンの『オハイオ州ワインズバーグ』とモリの『カリフォルニア州ヨコハマ町』の比較をした研究発表をきいた。翻訳の運びとなったのは、モリが広島弁での翻訳を求めていたからだと言われている。
- 4) 浅井信雄『アメリカ50州を読む地図』（東京、新潮社出版、1994年）、p.34.
- 5) 佐藤拓平『気骨のジャーナリスト尺魔が刻したカリフォルニア移民物語』（東京、亜紀書房、1998年）、p.48.
- 6) 1869年5月10日に、ネブラスカ州オマハから西へ延びたユニオン・パシフィッ



ク鉄道 (Union Pacific Railroad) と、カリフォルニア州サクラメントから東へ延びたセントラル・パシフィック鉄道 (Central Pacific Railroad) がユタ州プロモントリーで結合され、これによって大陸横断鉄道が完成したが、それまでは馬車による陸路と船旅が主流であった。

- 7) 桑井輝子『外国人をめぐる社会史—近代アメリカと日本人移民』(東京, 雄山閣, 1995年), p.47.
- 8) 中屋健一『アメリカ西部開拓史』(東京, 筑摩書房, 1963年), pp.59-60.
- 9) H. Wayne Morgan. *American Writers in Rebellion from Mark Twain to Dreiser* (New York: Hill and Wang, 1965), p.105.
- 10) 1861年から69年にかけて国務長官を務めたウィリアム・スーアード (William Henry Seward, 1801-72) がアラスカを720万ドルでロシアから買い取ったが、氷と雪とに覆われた役に立たない土地を買い取った愚行だとして当時、生まれた表現。

#### IV グロテスクな人びと

「希望の町」に住む『マクティীগ』の登場人物たちのなかで「夢を叶え、その後の人生への希望をつかんだ者」と考えられる人たちは、残念ながら主人公、もしくはそれに準じる人たちではない。トリナのおじにあたるエルバーマン (Oelbermann) や、マクティীগがライバルと捉えていただろう歯科医師がまず挙げられる。

エルバーマンは玩具の卸売りを生業とし、経済的に成功を収めている。マクティীগとトリナが結婚式をあげる数日前にエルバーマンから贈り物が届いた。誰もがこの、事業に成功したおじが何を送ってきたのかと期待に胸を躍らせる。

結婚式が行われる2、3日前に名刺が添えられた2つの箱が送られてきた。トリナとマクティীগはグラニスに手伝ってもらい、その箱を開けた。ひとつめの箱にはさまざまなおもちゃが入っていた。…もうひとつの箱は重く、縁を藤蔓でしばってあり、文字と印章が焼き付けてあった。「私が思うに一本当にそれはシャンパンだと思います」とグラニスがひそひそ声で言った。まさにその通りだった。モノポールがいっぱい

だった。なんて素晴らしいのだろう！そこにいる誰も、そうしたものをこれまで見たことがなかった。ああ、このエルバーマンおじさんという人は！これが金持ちであるということなのだ。他の人からの贈り物で、こんなにも深く印象づけられたものはなかった。<sup>1)</sup>

その場に居合わせたものたちは、その高価なものに驚き、大喜びする。エルバーマンが贈ってくれたものはシャンパン、しかも「モノポール」<sup>2)</sup>という名前の入った高級なシャンパンだった。トリナはこれに喜んでか、あるいはエルバーマンの成功にあやかってか、富くじで当てた5,000ドルをエルバーマンに投資することにした。その結果、毎月6パーセントの利率で利息を受け取ることになる。二人はこの利息やマクティーンの仕事、そしてトリナの内職から得る収入で生活するのだった。

ところが、その後マクティーンが職を失ってしまうと、トリナはますます守銭奴化して、わずかな小遣いも出し惜しみするようになる。マクティーンはトリナに怒りをおぼえ、トリナがトランクにこっそり貯めていたへそくりを盗み出してしまふ。手元から金貨がなくなってしまったトリナはエルバーマンに預けていた5,000ドルから少しずつお金を引きだすようになる。

エルバーマンはトリナのために小切手を書いては、トリナが必要な金額を持って行かれるように配慮する。ところが、ある日、残金が3,700ドルになったところで、彼は事務的処理の煩わしさからトリナに残額すべての小切手を書くことを提案した。

この事実は何を意味しているのだろうか。当時のサンフランシスコの物価をジャーナリストの佐渡拓平がその著書『気骨のジャーナリスト尺魔が刻したカリフォルニア移民物語』の中で紹介している。それによれば、どの程度の広さの部屋かはわからないが、部屋代一ヶ月が5ドルであったことがうかがえる。トリナが預けた5,000ドルで83年分、残額の3,700ドルで61年分である。つまり、エルバーマンはそれだけの大金<sup>3)</sup>をすぐに動かせるだけの財力があったのである。エルバーマンは「希望の町」サンフランシスコで「夢を叶え、そ

の後の人生への希望をつかんだ者」になっているのだ。

マクティーンがライバル視していた若い歯科医師は大学出身であり、マクティーンとは違って歯科医師の免許状も持っているのだから先行きに何の不安もない人生を送ることができる。病気は世の中の景気や不景気とはまったく関係のないことであるから、なおさらだろう。生活に困ったマクティーンが歯科医院の看板を買ってくれと頼み込むと、その若い医師は「ああ、今はもう必要ありません。私は小さな目立たない看板の方がいいんです。見栄を張ったようなものは要らないですよ。ただ名前と、その後に『歯科医院』とだけ書いてあるのがいいんです。あんな大きな看板は悪趣味ですよ。」<sup>4)</sup>と告げる。マクティーンが持っていたような大きな看板などには目もくれないのだった。もちろん、この若い医師にしてみれば、偽医者として同じ町で活躍していたマクティーンに嫌みの一つも言ってやろうという魂胆があったのかもしれない。医師の免許状さえもっていればその後の人生への希望をつかめるだけではなく、それを膨らませることもできるという自信がこの若い医者にはあったのだろう。

また、すでにドレスメーカーとしての職を引退したミス・ベイカーや製本を趣味とする獣医のグラニスは、ともに孤独な晩年を送っているように書かれている。しかし、それぞれの生活に経済的不自由さがあるようには思えない。ミス・ベイカーは毎日決まった時間にお茶を楽しみ、グラニスは手すざびに製本をして時間を過ごしている。

この二人に欠けているものがあるとすれば、それは心を通わせる相手がいないということだろうか。既に述べたことだが、この二人はわずか5センチほどの壁を挟んで両隣に住み、それぞれがお互いの日々の生活を押し量りながら生きているのだ。お互いが相手に関心を持ちながら、その気持ちを伝えられないままに人生を過ごしてきている。しかしそれでも、あたかもお互いが一緒に生活をしているかのように相手の行動だけはよくわかっているのだ。そしてあることをきっかけに二人の距離が縮まることになる。ミス・ベイカーは、グラニスの製本作業の音がしないことを気にかけ、自分から彼に話しかけていくの

である。

ミス・ベイカーにとっては、自分が実際にグラニスと話しているということ、2人が面と向かって、階段で会ったときに彼らを苦しめていたあの恐ろしいまでのきまり悪さを感じないで話しているということが現実のように思えなかった。彼女はよくこのことを夢見ていたが、いつもはるか遠い未来にと先延ばししていたのだった。それは今のように突然に、不用意にはなく、徐々に、少しずつやってくるはずのものだった。グラニスの部屋に実際に押し入っていくという無分別な行動を自分に許すという考えが、決して心に浮かんだことなどそれまでなかった。しかし彼女はグラニスの部屋にいるのだ。そして一緒に語り合い、きまり悪さが少しずつなくなってきたのだ。<sup>5)</sup>

そして彼らに「ひどく後れた、ごく平凡で平穏な人生のロマンス」(the long retarded romance of their commonplace and uneventful lives)<sup>6)</sup>が訪れ、自らの心情を吐露した結果、人生も晩年になって恋を成就させることになる。それからの二人は残された人生をどのように送っていくか知るよしもないが、「その後の人生への希望をつかんだ」はずである。

ところが、最後に砂漠で命を落とすことになるマーカスはどのような人生を送ったのだろうか。父親が獣医師でありながら、その真似事しかできないような息子で、獣医であるグラニスの助手のようなことをしているが、「ポーク通り改善クラブ」(Polk Street Improvement Club)<sup>7)</sup>の秘書をしたり、トリナの父親であるジッペ氏が手を出した事業に相乗りをしたりと、落ち着くことがない。そのジッペ氏自身も、既に述べたように、絨毯洗濯と室内装飾業に失敗すると、妻子を残してニュージーランドへと夢を求めて移住している。新天地で夢を叶えさえすれば、妻子を呼び寄せるはずであったが、ノリスはその後ジッペ氏がどのような人生を送ったのかについては記していない。

また、マーカスはいとこのトリナを身近に感じ、トリナに将来は自分の妻に

すると思わせている。トリナ自身も、いつになるかはわからないが、マーカスは自分の夫になるのだと思っていたのである。だが、マーカスは不実にもトリナをマクティーンに譲るようなことをしている。思いを寄せていたはずの女性を他人にいと簡単に譲るマーカスには、自らの社会的な立場についての自信が見られない。自信がないために、職を転々とするをくり返しているのだ。その自信のなさについて、ノリスは『マクティーン』の中で次のように述べている。

マーカスはある種の礼儀作法に自信がなかった。またそのことについてはポーク通りという小さな世界に住んでいる人びとも自信がなかった。売り子、配管見習い工、商人やそうした類の人びとの社会的地位ははっきりとしたものではなかったし、どのくらい深入りして、しかも「世間体」を保つことができるかということに確信が持てなかった。彼らが「きちんと」していきたいと思うと、必ずやり過ぎてしまうのだ。彼らが、世間体をつくろうことなど全くしない無法者に属しているというわけではなかった。ポーク通りは1ブロック上手の通りとつきあってはいた。住人たちが超えることのできないある種の限界がそこにはあったが、不幸なことにその限界というものはっきりとしていなかったのだ。彼らは自分たち自身に決して自信が持てなかった。彼らははっきりとした拍子に、無法者と間違われる可能性もあった。彼らは概して別の方向に間違っただけで進んでしまい、信じられないほどに形式ばっていた。社会的地位がしっかりしたものでない人ほど礼儀作法に鋭い目を持っている人はいない。<sup>8)</sup>

マーカスは最終的に、牧場経営に乗り出そうとする。工業化が進みゆく社会にあって、その目的は消滅したフロンティアへの郷愁からか、銀の拍車をつけ野生の馬を飼慣らすカウボーイになることを夢見ての牧場経営であった。しかし、まるで幼い少年が漠然と夢を抱くように、マーカスはカウボーイのなん

たるかを認識せずに、ただその姿に憧れているだけである。その証拠に、物語終盤で、トリナを殺害したマクティーンを砂漠に追い詰めながらも、マークスは自身が乗っていた馬を疲労困憊の果てに死なせてしまう。しかも持ち合わせていた水まで使い果たしてしまうのだ。牛のために水争いをして自らの命を落とす可能性があるのがカウボーイであるのに、その水の価値をマークスは知らないのだ。

そのマークスに、最初は親切な友だちのよう扱われ、恋人だったはずのトリナを譲られながら、やがてそのトリナに5,000ドルの富くじをきっかけに裏切られてしまうマクティーンはどうだろうか。

筆者はマクティーンがウィスキーに手をだすことを極度に避けていた点で、彼が己を理解している人物だと捉えた。

ハイゼはカクテルとストレートのウィスキーを飲んだ。そして歯医者と一緒に飲むようしきりに勧めた。しかしマクティーンは首を振って頑なに拒否した。「あっしにゃあ、それは飲めませんよ。どういいうわけか、体に合わないんでさあ。2杯もやると頭が変になっちゃうんでさあ。」マクティーンはビールをがぶがぶと飲み、ドイツ製のからしがたっぷりついたフランクフルトを腹一杯に詰め込んだ。<sup>9)</sup>

酒を飲んで暴れ、人間の内部に潜む獣性をむき出しにする自分の父親のかつての姿と、自分に歯科医師になる機会を与えてくれた優しい母親の困った姿がマクティーンの脳裏に焼き付いているのだろう。そのためアルコールの強いウィスキーには手を出さず、ビールをあおるだけだったのだ。その点では、マクティーンはマークスよりもずっと道理をわきまえた人物であると考えられる。トリナに出会うまでは、昼食後のビール一杯を楽しみに、仕事に精を出す人生を過ごしてきたのだ。おそらく、マークスにトリナを譲られることがなければ人生を台無しにしてしまうことはなかっただろう。また、この作品で誰もが目の色を変え、血眼になって求めている「金」をマクティーンは一顧だにし

ない。マクティーフはトリナを殺害した後、かつて働いていた北斗七星鉱山へ戻り、そこで知り合ったクリベンズ（Cribbens）と一緒に金の鉱脈を探し、発見しながらも、立ち去っている。つまり『金を得ること』や『貪欲』はマクティーフ自身の人生の中心的原動力ではない<sup>10)</sup>のだ。

マーカスは、トリナを譲っておきながらトリナとマクティーフに5,000ドルもの大金が転がり込んだことでマクティーフに嫉妬し、マクティーフが医師免許を持っていないことを当局に密告する。巡回医師や巡回の薬売りがごく当たり前だった19世紀のアメリカで、マクティーフが医師免許を持っているかどうかを疑う人物などいなかったはずだ。まして、それなりの技術を持ち合わせていればなおさらである。ところが、マーカスに裏切られてマクティーフは廃業せざるをえなくなってしまうのだ。

職を失ったマクティーフとトリナは、マーカスを憎むが、これはマーカスだけが原因のことなのであろうか。いや、そもそもマクティーフの運命は、彼の母親が巡回歯科医師にマクティーフを見習いとして預けたときに始まっていたのだ。鉱山で賄いとして働いていたマクティーフの母親に教育があるとは思えない。たまたま訪れた巡回歯科医師に会い、その仕事に息子がつけば立身出世し、自分や夫と同じような境遇からは抜け出せるだろうと母心に思ったのであろう。しかし、歯科医師に免許状が必要であることなど、教育のないマクティーフの母親が知るはずもない。アメリカでは長い間理髪師が医師を兼業していたことが、マクティーフの母親の頭にはあったかもしれないし、大学に行っていなければ医師になることはできないとまでは彼女は考えなかったのだ。また、マクティーフ自身もそうした知識を持ち合わせていなかったのである。

マクティーフはトリナを殺害したあと、自らが育った鉱山へ逃げ、名前を変えて職を得る。鉱夫としてドリルを動かしているうちに、歯医者としてドリルを動かしていたときと変わらないことに気づくのだった。

一度など、彼の現在の仕事と諦めざるを得なかった職業には似ていると

ころがあるように、ふと思うことさえあった。パーリー式ドリルに、以前使っていた歯科用エンジンと奇妙にも似通っているところがあった。ドリルやチャックは、巨大な鋸形のエキスカベーターやビット、歯科用切削以外の何物であろうか。それは彼が「歯科医院」でよくやっていたのと同じ作業であり、単に拡大されて、巨大で歪められ、グロテスクなものになっただけの、歯科のカリカチュアであった。…この生活は歯科医を、言葉では言い表せないほど喜ばせた。静かで、巨大な山々は帰ってきた放蕩息子のように彼を再び迎え入れた。彼は漠然と、なぜとも知らず、その力に従った。<sup>11)</sup>

マクティーフは鉱山での仕事に、ことばに尽くせぬ楽しさを得ている。山も彼を迎え入れるかのようであった。おそらく、マクティーフは巡回歯科医師の弟子にならず、鉱山で働き続けていれば幸せな人生を送ることができていただろう。

鉱山にいるときのマクティーフには、歯科医として働いていたときにはおよそ見当もつかないような「直感」が備わっている。その直感によってマクティーフは、殺人犯である自分を追いかける者から逃れるのである。しかし、ついにマーカスに追いつかれ、殴り合いの死闘の末に自らも死を迎えることになる。マクティーフもまたマーカスと同じように「夢を叶えることはもちろん、希望もつかめなかった者」なのである。

雑役婦のマリアは常日頃から、かつて自分の一族は黄金の食器を所有していたと誰彼なしに話している。雑役婦という職業からは到底考えられない話なのだが、彼女がメキシコ人であることで、回りの人たちは本当の話だと思っている。ゴールドラッシュによって肥大化したサンフランシスコであれば、誰の頭にもメキシコ・アステカ文明、そして金銀というイメージはあっただろう。しかもお互いの素性も知らずに生活している移民社会だけに、メキシコ人からの作り話も金や銀に関係する話なら、あり得るかもしれないと思うだろうし、また現実に日頃から「お金」だけに目を向けている人たちにとっては現実味のあ



る話と受けとめることもあろう。

一方のザーコウはガラクタを集めて店に並べる。マリアは「お金」をザーコウに、ザーコウはマリアに「金 (gold)」を求めた結果、彼らは結婚することとなった。愛など存在したわけではなく、ただ単に互いの欲望を満足させるために一緒になっただけに過ぎない。そのためか、ノリスはこの二人の間にできた子どもに産声さえあげさせていない。この二人にとって子どもは生涯における「単なる付帯的なできごと」(a mere incident)<sup>12)</sup>にしか過ぎず、ザーコウにとっては「食べ物を与えなければならぬ口を持っていて、また、何かとあてがわなければならない」(it had a mouth to be fed and wants to be provided for)<sup>12)</sup>ものだったのである。その程度の二人ゆえに天罰が下ったのか、マリアは出産のときに気がふれて、10日あまり痴呆状態になってしまう。その状態を脱したマリアはそれまで自慢の種にしていた、一族がかつて所有していたという黄金の食器についての話を一切忘れてしまう。ところがザーコウの「金」に対する執着心はおさまることはない。マリアが金を隠し持っているとは勘違いしたザーコウは、マリアを殺害し、ザーコウ自身も自殺か事故かはっきりしないが、命を落とすことになってしまう。この二人も、マーカスやマクティーフ同様に「夢を叶える」とか「その後の人生への希望をつかむ」以前に命を落としてしまったのである。マリアとザーコウは『マクティーフ』に登場する人物の中ではもっとも「歪められた、グロテスクな」(distorted, and grotesqued)<sup>13)</sup>な人物として配置されている。そのグロテスクな存在が生みだした子どもについて、ノリスは「それには名前すらなかった。奇妙な小さな雑種だった。二週間もかからずに生まれて死んだ。だが、その小さな肉体にユダヤとポーランドとスペインの血がまざりあっていた。」<sup>12)</sup>と記している。

そして彼らと同じく、「夢を叶えることはもちろん、希望もつかめなかった者」であるのがトリナである。トリナの人生を大きく変える原因となったのも「金」である。だがそれ以前に「その後の人生への希望をつかむ」機会を逸する原因をトリナはつくっていたのだ。それは「自発的」(spontaneous)<sup>14)</sup>に、また「無自覚」(little self-conscious)<sup>14)</sup>な状態で感じた愛が一体何なのかを

理解できなかったことである。トリナは自らの本能において「自発的」に、また「無自覚」に感じた愛こそ真実の愛であることを認識しないままに、いや、できないままに結婚したことがその後の人生に蹉跌をきたすことを予知できなかったのだ。

マーカスの裏切り行為によってマクティーンが廃業せざるをえなくなるや、明日の暮らしに不安を覚えて、トリナは異常なまでの守銭奴ぶりを発揮するようになる。生活を切り詰め、お金を使わないようにするために、昼食を出してくれるだろうと期待を抱きながら、用事がないのにミス・ベイカーのもとを訪ねる。彼女が不在だとわかると、今度はマリアを訪ねる。昼食を出してもらえなくても、お茶の一杯くらいは飲ませてくれるだろうとトリナは考えているのだ。それまでは朝食に、コーヒーにベーコンエッグ、ウィンナパン、昼食にはマッシュポテト付きのソーセージ、前日の夕食の骨付き肉を温め直したもの、あるいはシチューに入れたもの、塩漬けのニシンかアーティチョークあるいはサラダといった食事をとっていた彼女が、である。

富くじで当てた5,000ドルという大金があるにもかかわらず、トリナはマクティーンにも、自分にも、極力お金をかけないようにしていく。節約をすることは度を超さなければ、家計を守る優れた主婦として高く評価されるべきものであるが、守銭奴となってしまったトリナにとって、一銭でも失うことは自らの身を削られる思いがあるのだ。いやそれどころか金貨は自分の体の一部であるかのように、トリナはそれを口に入れて転がしている。また、ベッドにまき散らした金貨の上に裸のまま寝ることもあった。金貨が今や自らの肉体の一部になっているのだ。セアラローレンス大学 (Sarah Lawrence College) で永年教鞭を執った文芸評論家のガイスマー (Maxwell Geismar, 1909-79) はこうしたトリナの行動を「夫や家庭、あるいは子どもから得られる満足感に変わる唯一の欲望」(This was her dominant and only desire which had replaced the lost satisfaction of a husband, a home or children.)<sup>15)</sup>と解説しているが、筆者はこの解釈を疑問視する。果たしてトリナは、夫が職を失ったために守銭奴と化したのだろうか。マクティーンとの間に子どもをもうけることがなかつ

たために、その代わりとして異常なまでに金貨を愛するようになったのだろうか。

トリナには富くじによって得た 5,000 ドルがあり、この大金を手に入れた瞬間から、彼女は守銭奴への道を歩み始めたはずである。そう考えると、トリナが金貨をまるで自らの肉体の一部のようにしていく姿には、別の要素が関係しているように思えてならない。

もはやトリナ自身の分身とも言える金貨を渡すよう、マクティーンは彼女に要求するが、トリナはそれを拒否する。夫であるマクティーンを愛しているならば、それに応じたはずだ。つまり、マクティーンを愛しているということ自体が錯覚であったのだ。ノリスはマクティーンとトリナの関係について冷酷にも次のように説明している。

マクティーンはどうだったのだろうか？ その女性を自らに永久に結びつけたまさにその服従の行為そのものためにトリナはもはやマクティーンの目には以前ほど望ましいものとは思えないようになっていた。二人の破滅は既に始まっていたのだ。だが二人のいずれにも罪があるというわけではない。最初からこの二人はお互いを求め合っていたりはなかったのだ。偶然の機会が二人を向き合わせ、空を吹く風と同じように支配しがたい神秘的な本能が働いて二人の人生を結びつけたのである。二人の運命はどちらもこうなることを、つまり二人の魂そのものが偶然の戯れによって弄ばれることなど求めてはいなかった。そんなことを二人が知っていたら、そんな恐ろしい危険を避けたであろう。だが二人ともそのことについては発言することが許されなかったのである。<sup>16)</sup>

マクティーンとトリナは出会うべき人間同士ではなかった。それゆえに破滅の道をたどることになるのだ。トリナもまた「夢を叶えることはもちろん、希望もつかめなかった者」なのである。では、「夢を叶え、その後の人生への希望をつかんだ者」と「夢を叶えることはもちろん、希望もつかめなかった者」の

間にある違いとは一体何なのだろうか。マクティーンとトリナに焦点をあてて考えてみる。

マクティーンはこの作品に歯科医師として登場するが、免許状のない偽医者であった。だが、マクティーンは自らが偽医者であることを認識していない。巨大な歯科医院の看板をつくり、それを表に飾ることが彼の夢であり、そうすることによって自らが立派な歯科医師として成功したことになるかと信じているのである。

もちろんマーカスのように世の中を知っている人間もいただろうが、マクティーンは19世紀末の急速に近代化・工業化が進む社会から取り残されてしまった人間なのである。それは鉱山で賄いとして働いていた母親に通じる。母親がマクティーンを託した巡回歯科医師が免許状を持っていたら、教育もなければ、歯科医の知識のかけらもない若者を助手として連れ歩くことなど果たしていただろうか。母親もマクティーンも、歯科医師という名称だけ、つまり「仮象」としての歯科医師を見ていたにすぎず、「実在」としての歯科医師を見てはいなかったということである。

マクティーンは結局のところ、「実在」としてのトリナを見てはいなかった。つまり、自らの「仮象」としての職業と、彼の中に内在する獣性に惹かれてトリナが自分を受け入れたことに気づいていないのだ。トリナが、マクティーンが歯科医師としての立場を失ってもマクティーンから離れようとしなのは、後述するように、マクティーンの獣性によって与えられる喜びがあるからにほかならない。

トリナが「金」に目がくらみ守銭奴になる一方で、マクティーンは自ら避けていたウィスキーをあおるようになる。アルコールのために、トリナに対してわずかに残っていた愛情が「歪められ、奇怪な」(distorted, and ... monstrous)<sup>17)</sup>ものへと変化してしまう。マクティーンはトリナを殴打し、トリナの指にガリガリと噛みつくようになった。しかもどの指をもっとも痛がるかを記憶に留めていたのだ。マクティーンは決して愚かではない。「利口」(ingenious)<sup>18)</sup>に立ち回ることのできる人物なのである。上述したように、

マクティーフはみずからにとってウィスキーが危険な飲み物であることも心得ていた。それが、トリナの「金」への執着心をきっかけにアルコールを口にするようになり、彼の内部に閉じこめられていた獣性が現れただけである。

この悲劇はすべて、マクティーフが鉱山を離れたときから始まっていたと言える。マクティーフは母親の助言にしたがって「仮象」としての歯科医師を求めてしまった結果、その後の人生においても「実在」としての人生を歩めないグロテスクな人間として存在するようになってしまったのである。

マクティーフが最後まで手放さなかったカナリアを、批評家の中には「欲望」(greed)<sup>18)</sup>の象徴とする向きもあるが、カナリアは鉱山で働く人びとが有毒ガスを検知するために用いられていた。鉱夫にとっては、いわば命綱も同然の鳥である。そのカナリアをマクティーフが手放さなかったのは、彼自身が自らのレゾンデートル(存在理由)を認識していたからに他ならない。尾上典子教授は、他の評論家とは異なり、カナリアをマクティーフの分身<sup>19)</sup>と解釈している。映画史上、特筆すべき異才と評されるオーストリア生まれの映画監督、エリック・フォン・シュトロハイム(Erich von Stroheim, 1885-1957)によって、『マクティーフ』は映画化され、無声映画『グリード』(*Greed*, 1924)として公開された。この映画の中には、トリナとマクティーフの結婚式中に、マクティーフからトリナへ、カナリアがプレゼントされる場面がある。マクティーフが結婚前から飼っていたカナリアと、新たにやって来たカナリアの2羽は、歯科医師会から送られてきた営業停止の手紙をマクティーフとトリナが読んでいる最中に、猫に襲われる。二人を裏切ったマーカスと猫を重ね合わせるような映像があることを考えれば、シュトロハイムもカナリアを分身と捉えていると考えられる。分身とは自らの象徴でもある。「実在」としてのマクティーフは歯科医師ではなく鉱夫である。鉱夫の象徴とはカナリアであろう。そうだとすれば、カナリアを手放すわけにはいかないのだ<sup>20)</sup>。

マクティーフはトリナを殺害した後、鉱山に戻って仕事を得ると、そこで使う道具から、辞めざるをえなくなった歯科医師としての職業も鉱夫としての職業も、なんら変わりはないことを感じる。つまりマクティーフは「仮象」とし

ての歯科医師にならずともよかったのである。そうすればトリナに出会うこともなかった。鉦山はマクティーンにとって「実在」としての鉦夫になれる場所なのである。そこを離れたマクティーンは、「その後の人生への希望」を見つけることはおろか、その「希望」さえもつかみ取ることができない。

本稿の冒頭で引いた文芸評論家チェイスは「主人公、マクティーンはサンフランシスコの、字が読み書きできない歯科医師で、純真無垢な動物のような男である。その男が都会の腐敗した生き方の犠牲者になっている」(McTeague, the hero of the book, is an illiterate dentist in San Francisco, an innocent animal-like man who falls victim to the corrupt ways of city life.)<sup>21)</sup> としている。確かに都会の汚濁、ことにこの時代にはびこった金銭欲の、しかもマクティーン本人ではなく彼を取り囲む人たちの金銭欲の犠牲者になっている。しかし、それはとりもなおさず、自らが物事との本質を無自覚的に、また自発的に見抜けなかったからにかほかならない。マクティーンは鉦夫なのだ。「実在」としての鉦夫は鉦山に存在しなければならなかったはずだ。しかし、鉦山を去り、「仮象」としての歯科医師になったところに「実在」としてのマクティーンにグロテスク性を帯びる理由があったのだ。

一方のトリナはマクティーンから残忍な仕打ちを受けるにつれ、まるでマゾヒストであるかのように愛情を膨らませる。

それからどこか奇妙で、説明しがたく、この獣性のためにトリナはますます愛情深くなった。それはトリナのなかに服従にたいする病的な、不健康な愛を、抵抗できない男の力の意志に屈し身を任せるときの奇妙で、不自然な喜びを目覚めさせたのだ。<sup>17)</sup>

しかもトリナは、こうした倒錯した愛を恥ずかしげもなくマリアと自慢し合うのだ。「それぞれが自分の夫がもっとも残酷であることを信じさせようと努力をはらっていた」<sup>22)</sup> のである。トリナは自らの内に生じた、こうした変質的体質によって離婚をしようともせず、結局は指を数本失うことになる。マク

ティーンがかじられた指の傷口が原因で敗血症になっていたのである。

「えっ、これは敗血症ですねえ」彼は告げた。「もっともひどいものです。その指を切断しなければならんでしょう。間違いなく、さもなければ手をすべて、いやもっと悪いことになりかねません」

「それじゃ、私の仕事は！」とトリナが大きな声を出して言った。<sup>23)</sup>

自らの命を危険にさらしているにもかかわらず、この期に及んでトリナは「仕事」を通して得られる「金」に執着している。結局、トリナもまた「金」を生み出したであろうマクティーンを受け入れてしまったために、「仮象」としての人生を歩むことになり、グロテスクな人間と化してしまっているのだ。

マリアとザークウは互いに、「実在」としての「お金」や「金」ではなく、「仮象」としてのそれにしか目がいかないために最悪の結末を迎えることになる。そして、マーカスは地に足をつけた人生を歩もうとせず、トリナを手放し、本来なれるはずもない。それどころか近代化する時代の流れに逆らうようなカウボーイに憧れ、「実在」としての人生を歩もうとはしない。マーカスはカウボーイが前世紀的存在になっていくことに気づこうとせず、外面だけ、つまり「仮象」としてのカウボーイを目指してしまった。その結果、不幸な最期を遂げることになるのだ。そこには、上述したようにカウボーイにとって、自らの命を託す馬や水の重要性を何ら認識しない、グロテスクな人間としてのマーカス・スクーラしか存在しないのである。

## 【注】

- 1) Frank Norris. *Norris : Novels and Essays* (New York : Literary Classics of the United States, Inc., 1986), pp.375-6.
- 2) モノポールという語そのものは「独占」や「専売」という意味である。ワインの世界では「単独所有」という意味合いで、主にブルゴーニュ地方でその名前の畑を一つ会社が単独で所有し販売している時に使う。また現在でも高級シャンパンを製造しているハイドシーク・モノポール社 (Heidsieck & Co. Monopole) の企業名にもこの語が見られる。

- 3) 佐藤拓平の『気骨のジャーナリスト尺魔が刻したカリフォルニア移民物語』(p.52)によれば、1890年代のサンフランシスコの物価は、例を挙げると「米一斤10セント、ルーム代一ヶ月5ドル内外、牛肉一斤10セント、コーヒー一斤15セント、福音会ベッド代一晚5セント、日本旅館一泊食事付き25セント、プラム収穫一トンの拾い賃1ドル50セント(一日の賃金に換算すると75セント)」であったという。
- 4) Frank Norris, *op. cit.*, p.499.
- 5) Frank Norris, *op. cit.*, p.492.
- 6) Frank Norris, *op. cit.*, p.493.
- 7) Frank Norris, *op. cit.*, p.403.
- 8) Frank Norris, *op. cit.*, p.328.
- 9) Frank Norris, *op. cit.*, p.401.
- 10) 尾上典子「アメリカ文化における西部文学の意義—McTeagueを中心として」(亜細亜大学短期大学部学術研究所『経営学紀要』第8巻第1号, 2000年), p.71.
- 11) Frank Norris, *op. cit.*, p.533.
- 12) Frank Norris, *op. cit.*, p.431.
- 13) Frank Norris, *op. cit.*, p.533.
- 14) Frank Norris, *op. cit.*, p.326.
- 15) Maxwell Geismar. *Rebels and Ancestors : The American Novel, 1890-1915* (London : W. H. Allen, 1954), p.19.
- 16) Frank Norris, *op. cit.*, p.326.
- 17) Frank Norris, *op. cit.*, p.479.
- 18) Richard Chase. *The American Novel and Its Tradition* (New York : Doubleday Anchor books Doubleday & Company, Inc., 1957), p.192.
- 19) 尾上典子, 前掲書, p.44.
- 20) カナリアについては本論で解説を試みたが、マクティীগが大切にしていた六角アコーディオンについての解説はしていないので、ここで説明を加えておきたい。マクティীগにとっての六角アコーディオンは、他者のために演奏するものではなく、あくまでも自らに対してのみ精神的慰安をもたらすものである。したがってわずか6曲というレパートリーの少なさは問題にならないのであり、常に自らの脇に存在しなければならぬものであると考える。
- 21) Richard Chase, *op. cit.*, p.188.
- 22) Frank Norris, *op. cit.*, p.480.
- 23) Frank Norris, *op. cit.*, p.508.

## V おわりに

『マクティীগ』の登場人物が生きた19世紀中頃から後半にかけての時代は、既に述べてきたように産業が急激に発展し、アメリカはますます西へ西へ



と膨張する西漸運動の真っ只中にあった。国民はその波に乗り、ピューリタン思想の伝統に則って、他者に頼らぬ努力と勤勉さで自らの運命を切り開いていけば、いつの日にか神の恩寵を受けて社会的成功を達成できると信じていた。

この考え方は 1870 年にスタンダード石油会社 (Standard Oil) を設立したジョン・D・ロックフェラー (John Davidson Rockefeller, 1839-1937) が「神が私にお金をくださった。私はお金をつくり出す力は神様からの贈り物だと信じている」(God gave me my money. I believe the power to make money is a gift from God.)<sup>1)</sup> と言ったことに裏付けされていると言ってもよいだろう。

だが、尾上教授が指摘するように、「工業が飛躍的に成長した過程において、同種の事業あるいは関連事業の間で激しい競争が行われ」<sup>2)</sup>、まさにダーウィンの適者生存の理論が、自然界どころか人間社会にまで及んでいたのである。アメリカでは自由放任主義経済が徹底して支持され、イェール大学の社会・政治・経済学者ウィリアム・サムナー (William G. Sumner, 1840-1910) が社会進化論を支持するかたちでこの風潮を煽ることになった。その結果、アメリカにピューリタンが入植して以来一貫して息づいてきたこの思想はプロテスタントの資本主義精神と結びつき、弱肉強食を当然のこととするような思潮を、特に 19 世紀中葉から 20 世紀にかけて形成するに至った。資本を持つ者はますます肥大化し、また社会に顕在化するようになったが、持たざる者は社会の片隅に追いやられていった。追いやられ、置き去りにされ、取り残された個々人の価値などには見向きもしない社会風潮が生まれたのだ。アプトン・シンクレア (Upton Sinclair, 1878-1968) の『ジャングル』(*The Jungle*, 1906) にも描かれているように、この風潮は 20 世紀に入るとますます募っていったことは言うまでもない。

『マクティーン』に登場する人たちの多くは、その時代の流れに翻弄され、取り残されてしまったのである。東京大学教授の渡辺利雄は「人間はすべて遺伝と環境に左右されるのではなく、個人には自らの運命を自ら選択する可能性と責任」<sup>3)</sup> があるとしているが、彼らに、一体何が「実在」としての人生であり、何が「仮象」としての人生であるかを見抜ける力がそなわっていなければ

ば、取り残される人生を歩むより他に選択肢はない。取り残された人生、すなわち「仮象」としての人生を歩む人びとの姿は、時代の流れに乗って人生を歩んでいく人びとの目には、「グロテスク」と映るのである。

『マクティーン』という作品には、ただ単に自然主義小説というジャンルにのみ押し込められてしまわないだけの文学的価値がそなわっている。ノリスは、人の生き方、ことにアメリカの自由放任主義的資本主義社会で生きていくためには、アメリカ人として何を自らに醸成しなければならないかも考えていたと思われる。ホレイショ・アルジャー (Horatio Alger, 1832-99) の『ぼろ着のディック』(*Ragged Dick*, 1867) に登場するディックのように、生まれながらに貧しくとも、精励恪勤し続ければ立身出世するといった話は単なる神話にしかすぎない。

社会的に成功する人にはもっと別な要素があるはずだ。その要素は誰もがそなえていながら、ちょっとしたことがきっかけで見失ってしまうほど繊細なものではないかということにノリスは気づいていたのではないだろうか。それは自らが父親の命令にしたがって、パリから帰国し、カリフォルニア大学バークリー校に入ったものの中退せざるを得なかったことと関係があると筆者は考える。バークリー校へ入学するという道はノリスにとって、「仮象」としての道でしかなかったのだ。

たしかにノリスは一時、画家を志し、そのためにパリへ行った。しかしパリで文学に魅力を感じてのめり込んでいく。実業家である父親はそれを認めなかったが、文学や芸術に深い理解を示す母親がいた。夫と不仲になった母親はなぜハーヴァード大学がある町へノリスを連れて移住したのだろうか。息子が尊敬できる先生がいることを知っていたのだろうか。本稿では紙幅の関係上、そこまで論じることができないが、このことについては機会があれば別途論じてみたい。しかし、ノリスが一介の聴講生として出席することになるクラスが、その後の人生を決めたということは、文学の道こそが自分にとって「仮象」としての人生ではなく、「实在」としての人生であることを自発的・無自覚的にノリス自身が見抜いていたということであろう。この経験こそが『マク

ティীগ』構想のきっかけとなったはずだ。ノリスは単にサンフランシスコの一角にうごめく人たちの姿を外側から描き出す風俗小説に終わらせず、それぞれの人生の内側に入り込む形で『マクティীগ』を完成させたのだ。グロテスク性を帯びたトリナやマリアのように、「仮象」としての人生を歩まなければならない人のほうが、「実在」としての人生を歩む人よりも遙かに多かったであろう。だからこそ、ノリスは「仮象」としての人生を歩む人びとを描き出したのである。その証拠に、社会的に成功しているエルバーマンについては多くを語らない。

しかしノリスは、グラニスとミス・ベイカーには他の登場人物とは異なり、人生の晩年になって共に歩むべき相手を見つけるという明るい未来を用意した。言葉を唯一の頼りとするアメリカの文化風土に生きているのにもかかわらず、二人は最後の最後まで言葉によるコミュニケーションをせず、5センチの壁を通して聞こえてくる互いの生活の音だけを頼りに思いを寄せ合っている。その姿に、読者は彼らのグロテスクな一面を見いだすだろう。だが、トリナやマリア、あるいはザークウとは全く異質で、むしろ多くの人たちの共感を引く存在でもある。それは彼らが晩年になってようやく「実在」としての人生を見つけたと読者に感じさせているからであろう。「仮象」としての人生と、「実在」としての人生の差は、ほんの小さなものだろうが、その差を認識し、「実在」としての人生を歩み始めることはいつでも可能なのだということを、年老いた男女が示しているのだ。

『マクティীগ』は『グリード』、つまり「食欲」というタイトルで映画化され、金銭欲のために人生を台無しにするという捉え方がされているようだが、映画を含め、『マクティীগ』に、別の読み方も可能だということを本稿で示すことが多少でもできていれば幸いである。

#### 【注】

- 1) Peter Collier & David Horwitz. *The Rockefellers : an American Dynasty*. (New York : Holt, Rhinehart and Winston, 1976), p.48.
- 2) 尾上典子「アメリカ文化における西部文学の意義—McTeague を中心として」(亜細

亜大学短期大学部学術研究所『経営学紀要』第8巻第1号, 2000年), p.24.

- 3) 渡辺利雄『講義アメリカ文学史第Ⅱ巻—東京大学文学部英文科講義録』(東京, 研究社, 2007年), p.130.

### 【参考文献】

Åhnebrink, Lark. *The Beginning of Naturalism in American Fiction, 1891-1903*. Uppsala : Lundequistska Bokhandeln, 1950.

Alger, Horatio, Jr. (Hoeller, Hildegard, ed.). *Ragged Dick*. New York : W. W. Norton and Company, 2007. (亀井俊介／巽孝之監修, 畔柳和代訳『ぼろ着のディック』(東京, 松柏社, 2006年).)

Bercovitch, Sacvan (ed.). *The Cambridge History of American Literature*. Cambridge : Cambridge University Press, 2005.

Boyer, Paul S. (ed.) *The Oxford Companion United States History*. New York : Oxford University Press, 2001.

Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. New York : Doubleday Anchor books Doubleday & Company, Inc., 1957.

Collier, Peter & Horwitz, David. *The Rockefellers : an American Dynasty*. New York : Holt, Rhinehart and Winston, 1976.

Faragher, John Mack, Buhle, Mari Jo, Czitrom, Daniel, Armitage, Susan H. *Out of Many : A History of American People*. Upper Saddle River : Prentice Hall, 1997.

Flexner, Stuart Berg. *I Hear America Talking : An Illustrated History of American Words and Phrases*. New York : Simon and Schuster, 1976.

———. *Listening to America : An Illustrated History of Words and Phrases from Our Lively and Splendid Past*. New York : Simon and Schuster, 1982.

Geismar, Maxwell. *Rebels and Ancestors : The American Novel, 1890-1915*. London : W. H. Allen, 1954.

Graham, Don. *Critical Essays on Frank Norris*. Boston : G. K. Hall & Co., 1980.

Hart, James D. *The Oxford Companion to American Literature*. New York : Oxford University Press, 1965.

Leong, Russell C. *Amerasia Journal, Vol.7*. Los Angeles : Asian American Studies Center, University of California, 1980.

Morgan, H. Wayne. *American Writers in Rebellion from Mark Twain to Dreiser*. New York : Hill and Wang, 1965.

Mori, Toshio. *Yokohama, California*. Seattle and London : University of Washington Press, 1949, 1985. (トシオ・モリ著, 大橋吉之輔訳『カリフォルニア州ヨコハマ町』東京, 毎日新聞社, 1978年.)

Norris, Frank. *Norris : Novels and Essays*. New York : Literary Classics of the United States, Inc., 1986.

Norton, Mary Beth (et al). *A People and a Nation : A History of the United States. (sixth edition)*. Boston : Houghton Mifflin Company, 2001.

Turner, Frederick Jackson. (with commentary by John Mack Faragher). *Reading Frederick Jackson Turner*. New Haven : Yale University Press, 1994.

Zinn, Howard. *A People's History of the United States : 1492-Present (Perennial Classics)*. New York : Perennial, 2003.

浅井信雄『アメリカ 50 州を読む地図』東京, 新潮社出版, 1994 年.

尾上典子「アメリカ文化における西部文学の意義—McTeague を中心として」亜細亜大学短期大学部学術研究所『経営学紀要』第 8 巻第 1 号, 2000 年.

—————「ロマン主義作家としての Frank Norris—McTeague を中心として—」松浦暢教授古稀記念論集『水の流れに』東京, 中央公論事業出版, 2000 年.

亀井俊介, 鈴木健次監修『資料で読むアメリカ文化史③都市産業社会の到来 1860 年代—1910 年代』東京, 東京大学出版会, 2006 年.

桑井輝子『外国人をめぐる社会史—近代アメリカと日本人移民』東京, 雄山閣, 1995 年.

佐藤拓平『気骨のジャーナリスト尺魔が刻したカリフォルニア移民物語』東京, 亜紀書房, 1998 年.

猿谷要『西部開拓史』東京, 岩波書店, 1982 年.

高取清『フランク・ノリス—作品と評論』東京, 彩流社, 2003 年.

中田幸子『ジャック・ロンドンとその周辺』東京, 北星堂書店, 1981 年.

中屋健一『アメリカ西部開拓史』東京, 筑摩書房, 1963 年.

渡辺利雄『講義アメリカ文学史第Ⅱ巻—東京大学文学部英文科講義録』東京, 研究社, 2007 年.

#### 【参考資料 (DVD)】

Stroheim, Eric von. (directed). *Greed*. Metro-Goldwyn-Mayer, 1924.

The Grotesque in Frank Norris's *McTeague : A Story of San Francisco*

by

Shoko Nakajima

This article is intended to understand who and why the grotesque are in *McTeague : A Story of San Francisco* (1899) by Frank Norris commented as one of the most important Realist-Naturalist writers in America, and to analyze this novel in order to examine and prove a hypothesis set up by the author that this novel can be explicated not only as the product by a realist-naturalist novelist but the one by a romance writer.

*McTeague* includes three stories about man and woman relationships. While one of them had a happy ending, the other two had tragic endings. The men and women in the two stories with tragic endings seem to give the readers an impression that they have something distorted and grotesque.

It was so-called the Gilded Age represented by rapid industrialization, modernization and laissez-faire capitalism that made some people put on grotesqueness. After the Civil War, America developed remarkably in industry and achieved economic prosperity. The wave of industrialization overwhelmed San Francisco, the setting of the story of *McTeague*. American industrial growth occurred in the laissez-faire capitalist environment and its perfect capitalist system became securely established.

Business leaders rapidly accumulated a vast amount of capital, shielding themselves behind the doctrine of social Darwinism. It also wielded influence over the general public. Though some people seized an opportunity and possessed wealth, most did not. Many had difficulty in keeping up with constantly changing socio-economic situation of the time. Most of the characters in *McTeague* are no exception to this. They are driven into the obscure corner of the American economically competitive society. They don't

know how to survive the situation. They can do nothing but lead their lives not in a world of reality but in a world of semblance. McTeague, a protagonist of this story, might be considered as one of them. He earns his living by working as a dentist without a license to practice dentist. He lives his life not in a world of reality but in a world of semblance. So does McTeague's spouse, Trina.

After her husband loses his job, Trina gets parsimonious and becomes a ruthless miser. She has only the saving on her mind all the time. If money was her blood and flesh / part of herself, she should share it, as wife, with her husband. She never ever does so. Is she married to McTeague himself? Or is she married to his profession?

The author is convinced that Trina does not realize that she leads her life not in a world of reality but in a world of semblance. Neither McTeague nor Trina has capability to distinguish reality from semblance. People of this type come across to us as the grotesque.

*McTeague* was made into a movie by Erich von Stroheim, an Austrian-born film star and director of the silent era. The title is *Greed*. Stroheim interprets *McTeague* as the work describing how people ruin themselves through their "greed" for money. The author would be happy, however, if any of the readers of this article should appreciate her own interpretation of *McTeague*.